

正法眼蔵第五即心是仏

# 即心是仏に参ずる

2018年12月

金子勝俊

## 正法眼蔵第五即心是仏

仏々祖々いまだまぬかれず<sup>ほうにん</sup>保任  
しきたれるは即心是仏のみなり。し  
かあるを、<sup>さいてん</sup>西天<sup>1</sup>には即心是仏なし、  
<sup>しんたん</sup>震旦<sup>2</sup>にはじめてきけり。学者おほく  
あやまるによりて<sup>しゅうしやくじゆしやく</sup>將錯就錯<sup>3</sup>せず。將  
錯就錯せざるゆゑに、おほく外道に  
零落す。

いはゆる即心の話を書きて、痴人  
おもはくは、衆生の慮知念覚の未発  
<sup>ぼだいしん</sup>菩提心なるをすなはち仏とすとおも  
へり。これはかつて<sup>しやうし</sup>正師<sup>3</sup>にあはざる  
によりてなり。

外道のたぐひとなるといふは、<sup>さい</sup>西  
<sup>てんじくこく</sup>天竺国<sup>3</sup>に外道あり、<sup>せん</sup>先尼<sup>3</sup>となづく。

かれが見処のいはくは、大道はわ  
れらがいまの身にあり、そのていた  
らくは、たやすくしりぬべし。いはゆる  
苦楽をわかまへ、<sup>つう</sup>冷暖を自知し、<sup>よう</sup>痛  
<sup>りやうち</sup>癢を了知す、萬物にさへられず、諸  
境にかかはれず。物は去来し<sup>きやう</sup>境は消  
滅すれども、<sup>れいち</sup>靈知はつねにありて不  
変なり。此の靈知、ひろく周遍せり。  
<sup>ほんしやうがんに</sup>凡聖含靈の<sup>かくい</sup>隔異なし。そのなかに、  
しばらく<sup>もうほう</sup>妄法の<sup>くうげ</sup>空花ありといへども、  
一念相應の智慧あらはれぬれば、  
物も亡じ、境も滅しぬれば、<sup>れいち</sup>靈知本  
<sup>しやう</sup>性ひとり了々として<sup>ほん</sup>鎮常なり。たとひ  
身相はやぶれぬれども、靈知はやぶ  
れずしていづるなり。たとへば<sup>にんしや</sup>人舍

仏道の開祖そしてそれを受け継いできた祖師方が生  
涯離れることなく背負い続けてきたものは即心是仏た  
だそれである。しかしながらインドには即心是仏とい  
う言葉はない。中国に至って初めて聞くのである。仏  
道を学問ととらえる学者連中はそれを間違つて捉えて  
しまい、誤りを究めようとせず、誤りの中にある真実  
を見つめないが故に、多くは真の仏道から離れ外道に  
落ちている。

周知の即心という言葉を知り、人の持つ分別心が  
真実を求めんとする、その前のうぶな状態、愚か者は  
それをとらえて(即心是)仏であると思う。このような  
誤りはそれまで正しい師に会うことがなかったこと  
によるのである。

仏道以外の宗旨を奉ずる外道の類というのはインド  
にその例があり先尼(セーニヤ)と称されている。

### 【以下、先尼外道の見解】

かれらの言わんとすることは、我々の今の身体が教  
えの根本にあるということである、その有様は容易に  
分かると思うが、いわゆる苦楽を心得て、熱い寒いを  
知り、<sup>かゆ</sup>痛い癢いを承知する。あらゆるものに邪魔され  
ず、環境に左右されない。物は時とともに移り変わ  
り、周囲の物は消滅しても、<sup>きやう</sup>靈魂は常に存在して不変  
である。この靈魂は広く世界にゆきわたっている。凡  
人も聖人も、また全ての生き物に分け隔てがない。そ  
の中で、時々迷いの末にありもしない花を空に見るこ  
とはあつても、ただひたすら念じそれ相應の智慧が現  
れたとなると、物はなくなり周囲も消滅し、<sup>きやう</sup>靈魂が一  
人悠々としてどっしりと留まることになる。例え身体  
が壊れてしまつていても<sup>きやう</sup>靈魂は壊れずにその身体から  
逃れるのである。例えば家が火事になって焼けてしま  
つても、家主はそこから出ていくだけである。明らか

1 インド

2 中国

3 錯(誤り)をもって錯りにつく

の失火にやくるに、舎主いでてさるがごとし。昭々靈々としてある、これを覚者智者の性<sup>しやう</sup>といふ。これをほとけともいひ、さとりとも称ず。自他おなじく具足し、迷悟ともに通達せり。万法諸境ともかくもあれ、靈知は境ともならず、物とおなじからず、歴劫<sup>りやく</sup>に常住なり。いま現在せる諸境も、靈知の所在によらば、眞実といひぬべし。本性より縁起せるゆゑには実法なり。たとひしかありとも、靈知のごとく常住ならず、存没<sup>ぞんもつ</sup>するがゆゑに。明暗にかかはれず、靈知するがゆゑに、これを靈知といふ。また眞我と称じ、覚元<sup>かくげん</sup>といひ、本性と称じ、本体と称ず。かくのごとくの本性をさとるを常住にかへりぬるといひ、帰眞の大士といふ。これよりのちは、さらに生死に流転せず、不生不滅<sup>しやう</sup>の性海<sup>かい</sup>に証入するなり。このほかは眞実にあらず。この性あらはさざるほど、三界六道<sup>4</sup>は競起するといふなり。これすなはち先尼外道が見なり。

に魂がそこに宿っている、これが覚れるものの本来の姿であるという。これを仏とも言い、また悟りとも称したりする。自分にも他人にも具わり、迷いにも悟りにも通じている。あらゆるもの、あらゆる対象が何であれ、靈魂は周囲に同化せず、物と同じにはならず、未来永劫常住不変である。今ここに現れている環境世界も靈魂を前提にしなければ眞実とは言えない。本来の性質によって縁起して生じてきたからには眞実の法であろう。しかし例えそうではあっても、環境世界は存在したり消滅したりするが故に靈魂のように常住不変ではない。明るい暗いに関わりなく、靈魂する(肉体を離れて生き残る)が故にこれを靈魂というのである。また眞実の我と言ったり、覚りの元だと言ったり、本性と言ったり、また本体と言ったりする。このように本性を悟ることを常住不変に帰すると言ひ、眞実に帰する悟り得た人という。悟りを得たのちはさらに生死に流転することなく、生じたりあるいは滅したりということのない世界に入っていくのである。この他に眞実はない。この本性が現れていない間は迷いの世界を輪廻するのである。これが即ち先尼(セーニヤ)という外道の考え方である。

#### 【ここまでが先尼外道の見解】

大唐国大證国師慧忠和尚<sup>5</sup>僧に問う、「従何方来(何れの方よりか来れる)」  
僧曰「南方来(南方より来る)」  
師曰「南方有何知識(南方に何なる知識か有る)」  
僧曰「知識頗多(知識頗る多し)」  
師曰「如何示人(如何が人に示す)」

大唐国の大證国師慧忠和尚が僧に問うた：「どこから来たのか」

僧が言う「南方から来ました」

師が言う「南方にはどんな仏法の指導者がいるのか」

僧が言う「南方にはたくさんの方の指導者がいます」

師が言う「どのように指導しているのか」

<sup>4</sup> 三界：欲界、色界、無色界、六道：地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

<sup>5</sup> 大唐国師慧忠：南陽慧忠 (?～775)、六祖慧能の法嗣。

僧曰「彼方知識、直下示学人即心是仏。仏是覚義、汝今悉具見聞覚知之性。此性善能揚眉瞬目、去来運用。徧於身中、控頭頭知、控脚脚知、故名正遍知。離此之外、更無別仏。此身即有生滅、心性無始以来、未嘗生滅。身生滅者、如龍換骨、似蛇脱皮、人出故宅。即身は無常、其性常也。南方所説、大約如是。(僧曰「彼方の知識、直下に学人に即心是仏と示す。仏は是れ覚の義なり、汝今、見聞覚知<sup>6</sup>の性を悉具せり。此の性善能く揚眉瞬目し、去来運用す。身中に徧く、頭に控るれば頭知り、脚に控るれば脚知る、故に正遍知<sup>7</sup>と名づく。此れを離るの外、更に別の仏無し。此の身は即ち生滅有り、心性は無始より以来、未だ嘗て生滅せず。身、生滅するとは、龍の骨を換ふるが如く、蛇の皮を脱し、人の故宅を出づるに似たり。即ち身は是れ無常なり、其の性は常なり。南方の所説大約此の如し。)」

師曰、「若然者、与彼先尼外道無有差別。彼云、「我此身中有一神性、此性能知痛癢、身壞之時、神即出去、如舍彼焼舍主出去。舍即無常、舍主常矣。審如此者、邪正莫辨、孰為是乎。吾比遊方、多見此色。近尤盛。聚却三五百衆、目視雲漢云、是南方宗旨。把他壇經改換、添糝鄙譚、削除聖意、惑乱後徒、豈成言教。苦哉、吾宗喪矣。若以見聞

僧が言う、「南方の指導者はいつでも学僧に即心是仏と教えています。仏は覚りの意味です。『おまえは今、見たり聞いたりして世界を把握する本性（六識）を具えている。この本性はよく眉を上げたり目を瞬いたりして、昔からよく働いてきた。それは体中にゆきわたり、頭に至れば頭を知り、脚に至れば脚を知るといった具合であり、それゆえ如来と名付けています。これを離れて別に仏があるわけではありません。この身体には生滅がありますが、心というものには昔から消滅はありません。身体が消滅するとは龍が大きくなるために骨を取り替えるように、また蛇が脱皮し人が新しい家に移り住むようなものである。即ち身体は無常なのであるがその本性は常なのである。』南方の指導者の教えは凡そこのようなものです。」

大証国師が言う「若しそうであるならば、それは先尼（セーニヤ）という外道の教えと違いはないことに

<sup>6</sup> 六識のはたらき、六識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識。）

<sup>7</sup> 正遍知：如来の別名、完全に真理を悟ったものの意、仏教学辞典。但し岩波文庫の注では、『ここは正しい使い方ではない』とされている。

覚知、是為仏性者、浄名不応云法離見聞覚知、若行見聞覚知、是即見聞覚知、非求法也。(師曰く、「若し然らば、彼の先尼外道と差別有ること無けん。彼が云く、「我が此の身中に一の神性有り、此の性能く痛癢を知り、身壊する時、神即ち出で去る、舎の焼かるれば舎主出で去るが如し。舎は即ち無常なり、舎主は常なり」と。審すらくは此の如きは、邪正辨ずるなし、孰んが是とせんや。吾れ比遊方せしに、多く此の色を見き。近尤も盛んなり。三五百衆を聚却て、目に雲漢を視て云く、「是れ南方の宗旨なり」と。他の壇經を把つて改換して、鄙譚を添糅し、聖意を削除して後徒を惑乱す、豈言教を成らんや。苦哉、吾が宗喪びたり。若し見聞覚知を以て是を仏性とせば、浄名は応に「法は見聞覚知を離る、若し見聞覚知を行ぜば、是即ち見聞覚知なり、法を求むるに非ず」<sup>8</sup>と云ふべからず) )

大証国師は曹谿古仏の上足なり、天上人間の善知識なり。国師のしめす宗旨をあきらめて、参学の亀鑑とすべし。先尼外道が見処としりてしたがふことなかれ。

近代は大宗国に諸山の主人とあるやから、国師のごとくなるはあるべからず。むかしより国師にひとしかる

なる。その教えでは「私のこの身体の中に一つの神性が宿っている、この神性はよく痛い痒いを知っていて、体が壊れるとき、神がそこから出ていく、家が焼かれるとき、家主が家を出ていくようなものである。家は即ち無常(うつり変わりがある)であるが、家主は常(うつり変わらない)である」。良く考えてみれば、この考えは邪と正の区別がついていないのである、それをどうして是とすることができるのか。私がおの昔、修行のために行脚していた時、こういうことを言いふらしている連中を見た。最近、大変盛んになってきている。300人あるいは500人もの修行僧を集めて、天の川を見ながら言うのである、「これが南方の教えである」と。あの六祖檀經<sup>9</sup>をもってきて改変し、つまらない話を付け加え、六祖の教えを削除して後の学徒を惑わしめている、そんなことでどうして仏の教えを伝えることができようか。切ないことである、吾が達磨大師の教えは滅びてしまったのであろうか。もし見聞覚知<sup>10</sup>のはたらきをもってこれを仏性とするのであれば、浄名居士維摩詰<sup>11</sup>は『法は見聞覚知<sup>12</sup>のはたらきを離れている、もし見聞覚知をはたらかせるのであれば、これがすなわち見聞覚知なのであって、法を求めていることにはならない。』というはずがないのである。」

大証(慧忠)国師は六祖慧能古仏の高弟であり、天上人間界の素晴らしい指導者である。国師の示す教えを明らかにして、仏道を学ぶ上でのお手本とすべきである。先尼(セーニャ)外道が世の中を観る立場であると知ってそれに従ってはならない。

近頃は、大宗国の山々で、その山主となっている輩が国師のように立派であるとは全く言えない。昔より国師に匹敵する指導者がいたことは一度もなかった。

<sup>8</sup> 維摩經六、不思議品。

<sup>9</sup> 六祖檀經：六祖大鑑慧能の説法等を記したもの。頓悟、見性などの思想を説くが異本が多く、道元禪師は見性を否定する立場からこれを偽書だとする。本巻以外に山水經、仏教の巻など。

<sup>10</sup> 六識のこと、見(眼識)、聞(耳識)、覺(鼻識、舌識、身識)、知(意識)

<sup>11</sup> 維摩經の主人公

<sup>12</sup> 見たり聞いたりして世界を把握する本性(六識)

べき知識いまだかつて出世せず。しかあるに世人あやまりておもはく、臨濟・徳山も国師にひとしかるべしと。かくのごとくのかからのみおほし。あはれむべし、明眼の師なきことを。

いはゆる仏祖の保任する即心是仏は、外道二乗ゆめにもみるところにあらず。唯仏祖与仏祖のみ即心是仏しきたり、究尽しきたる聞著あり、行取あり、証著あり。

仏、百草を拈却しきたり、打失きたる。しかあれども、丈六<sup>16</sup>の金身に説似せず。

即、公案あり、見成を相待せず、敗壞を廻避せず。

是、三界<sup>17</sup>あり、退出にあらず、唯心<sup>18</sup>にあらず。

心、牆壁<sup>19</sup>あり、いまだ泥水<sup>20</sup>せず、いまだ造作<sup>21</sup>せず。

あるいは即心是仏を参究し、心即仏是を参究し、仏即是心を参究し、即心仏是を参究し、是仏心即を参究す。かくのごとく参究、まさしく即心是仏、これを挙して即心是仏に正伝するなり。かくのごとく正伝して今日

そうであるのに、世の人は誤って思うに、臨濟義玄<sup>13</sup>、徳山宣鑑<sup>14</sup>も国師に等しいと。このように考えるものばかり多い。真実を見通す目を持った師がいなかったことは哀れむべきである。

いわゆる仏祖が保持し続けてきた即心是仏とは外道や二乗<sup>15</sup>の夢にも見ることはないものである。唯々仏祖のみが即心是仏を行じ尽くし、究め尽してきたと拝聴し、実践し、実証するのである。

仏、とはそこらに生えている草花を仏として大事につまみあげ、一切の囚われを捨て去る。しかしそれを黄金仏と説いて崇め奉ることはしない。

即、とは目の前の現れであり真実であり、脱落し尽くし、壊れるときは壊れるがまま。

是、とは迷いの世界に留まって退出するでもなく、しかし心にこだわることもない。

心、は物であるとする言あり、物は堂々として泥に汚れず、欲にまみれず執着しない。

このように即心是仏を究め尽せば、その四字のそれぞれを入れ替えて、心即是仏と言おうが、仏即是心と言ひ換えようが、即心仏是であろうが、是仏心即にしてみても、究めつくしたところに違いはない<sup>23</sup>。まさに即心是仏を採り上げて即心是仏という真実を正伝するのである。このように真実が伝えられて釈迦牟尼仏以

<sup>13</sup> 臨濟義玄（?～867）黄檗希運の法嗣

<sup>14</sup> 徳山宣鑑（780～865）龍潭崇信の法嗣

<sup>15</sup> 声聞乗及び縁覚乗。大乘仏教から見たときの小乗仏教の立場。

<sup>16</sup> 丈六とは一丈六尺で4メートル85センチ。

<sup>17</sup> 三界：欲界(本能的な欲望の世界)、色界(諸欲から離れ、しかし物質から解放されていない世界)、無色界(物質の束縛を離脱した世界)。

<sup>18</sup> 唯心：三界のすべてのものは心から変現し、心を離れて存在しないもので、ただ心だけが唯一の実在であるという意。華嚴経から。日本国語辞典。

<sup>19</sup> 国師、因みに僧問ふ「如何にあらんか是れ古仏心」。師云はく「牆壁瓦礫」(古仏心、身心学道)

<sup>20</sup> さらに仏性を道取するに、挖泥滞水なるべきにあらざれども、牆壁瓦礫なり。(仏性)

<sup>21</sup> いはゆる牆壁はいかなるべきぞ。なにをか牆壁といふ、いまいかなる形段をか具足せると、審細に参究すべし。造作より牆壁を出現せしむるか、牆壁より造作を出現せしむるか。(古仏心)

<sup>23</sup> 即心是仏のこのような入れ替えは、「心は即ちこれ仏である」という通常の読み方を排除し、あくまで即心是仏(そくしんぜぶつ)と読むことを求めている。

にいたれり。いはゆる正伝しきたれる心といふは、一心一切法、一切法一心なり。

このゆゑに古人いはく、「若人識得心、大地無寸土(若し人、心を識得せば、大地に寸土なし)。」

しるべし、心を識得するとき、蓋天<sup>がいてん</sup>撲落し、市地裂破す。あるいは心を識得すれば、大地さらにあつさ三寸をます。

古徳云く、「作麼生か是れ妙淨明心。山河大地、日月星辰。」<sup>22</sup>

あきらかにしりぬ、心とは山河大地なり、日月星辰なり。しかあれども、この道取するところ、すすめば不足あり、しりぞくればあまれり。山河大地心は、山河大地のみなり。さらに波浪なし、風煙なし。日月星辰心は、日月星辰のみなり。さらにきりなし、かすみなし。生死去来心<sup>しやうじこらいしん</sup>は、生死去来のみなり、さらに迷なし悟なし。牆壁瓦礫心<sup>しやうへきがりやくしん</sup>は、牆壁瓦礫のみなり。さらに泥なし、水なし。四大五蘊心<sup>うん</sup>は、四大五蘊のみなり。さらに馬<sup>ば</sup>なし、猿なし。椅子拵子心<sup>ほつす</sup>は、椅子拵子<sup>ほつす</sup>のみなり。さらに竹なし、木なし。かくのごとくなるがゆゑに、即心是仏、不染汚即心是仏なり。諸仏、不染汚諸仏なり。

しかあればすなはち、即心是仏とは、発心修行菩提涅槃の諸仏なり。いまだ発心修行菩提涅槃せざるは、

来、今日に至っている。そのように伝えられた真実なる心は仏法そのものであり、仏法はまさに真実なる心そのものである。

この故に昔の聖人は言っている、「もし人が真実なる心を知り得たなら、大地にわずかの土もない」。

分かるであろうか、真実なる心を知り得たとき天地はひっくり返り、大地は炸裂する。あるいはその心を知り得たならば大地は強靱なる礎となる。

聖人は言う、「妙淨なる明心とは何であろうか。それは山河大地と太陽、月、星だよ。」

はっきりと分かる、真実なる心とは山河大地であり、太陽や月や星である。しかしながら、ここで言わんとするところを強調すれば足りないものがでてくるし、抑えすぎれば余り有る。

山河大地に立つ心は山河大地のみである。さらに波があるわけでもなく、風や霧もない。太陽月星の下にある心は太陽月星のみである。さらに霧もなければ霞もない。生まれ変わり死に変わる日常の心は生まれ変わり死に変わる日常の心のみであって、そこに迷いも悟りもない。ガラクタに宿る心はガラクタのみである。さらに煩惱の元である泥水などない。物質世界を構成する心は世界を構成する物質のみである。煩惱に惑う馬や猿はいない。椅子拵子に籠る心は椅子拵子<sup>ほつす</sup>のみに籠る。もとの竹でも木でもない。そうであるが故に即心是仏とは汚れのない即心是仏である。諸仏は汚れなき諸仏である。

であれば、すなわち即心是仏とは、仏道に目覚め、修行し、悟りを得、涅槃に至る諸仏である。未だ目覚め、修行し、悟りを得、涅槃に至っていないものは即

<sup>22</sup> 瀧山靈祐、仰山慧寂の語、真字正法眼蔵中 68

<sup>24</sup> 意馬心猿、馬が走り回り猿が騒ぎ立てるのを制しがたいことから、煩惱のために心の乱れを抑えがたいこと。日本国語辞典

<sup>25</sup> 拵子：導師が法要の際などに手にする法具で先に毛のついた棒。

即心是仏にあらず。たとひ一刹那に  
発心修証するも即心是仏なり、たと  
ひ一極微中に発心修証するも即心  
是仏なり、たとひ無量劫に発心修証  
するも即心是仏なり、たとひ一念中  
に発心修証するも即心是仏なり、た  
とひ半拳裏に発心修証するも即心是  
仏なり。しかあるを、長劫に修行作仏  
するは即心是仏にあらずといふは、  
即心是仏をいまだ見ざるなり、いま  
だしらざるなり、いまだ学せざるな  
り。即心是仏を開演する正師を見ざ  
るなり。

いはゆる諸仏とは、釈迦牟尼仏な  
り。釈迦牟尼仏、これ即心是仏なり。  
過去現在未来の諸仏、ともにほとけ  
となるときは、かならず釈迦牟尼仏と  
なるなり。これ即心是仏なり。

#### 正法眼蔵即心是仏第五

爾時延応元年五月二十五日、在  
雍州宇治郡かんのだうり こうしょうほうりんじ観音導利興聖宝林寺示  
衆

于時寛元三年乙巳七月十二日、在  
越州吉田県大仏寺侍者寮書写之  
懷井

心是仏ではない。例え一瞬であつても仏道に目覚め、  
修行し、悟りを得るものは即心是仏である、例え極小  
の世界で仏道に目覚め、修行し、悟りを得るものも即  
心是仏である、例え限りない時間の中で仏道に目覚  
め、修行し、悟りを得るものものも即心是仏である、  
例え、ある一つの念いの中で仏道に目覚め、修行し、  
悟りを得るものものも即心是仏である、例え半握りの拳の  
世界で仏道に目覚め、修行し、悟りを得るものも即心  
是仏である。そうであるのに、長い時間に亘って修行  
し続け真理を得ようとするのは即心是仏ではないとい  
うのは即心是仏を本当に理解できてはいないのであ  
り、即心是仏を未だに見ていないのであり、知らない  
のであり、未だに学んでいないのである。即心是仏を  
説いて聞かせようとする正しい師に出会ったことがな  
いのである。

いわゆる諸仏とは発心修行菩提涅槃を行ぜられた釈  
迦牟尼仏である。その釈迦牟尼仏が即心是仏である。  
過去現在未来に亘って現れる諸仏がそれぞれ仏になる  
ときは必ずそのような釈迦牟尼仏となるのである。こ  
れが即心是仏の正体なのである。

#### 正法眼蔵即心是仏第 5

この時延応元年（1239年）5月25日、雍州宇治郡  
かんのだうり こうしょうほうりんじ観音導利興聖宝林寺に在って衆に示す。

時に寛元三年（1245年）木の弟巳7月12日、越州吉  
田県大仏寺侍者寮にあつて懷讓がこれを書写した。



参考文献

- 日本思想体系 道元 上下 岩波書店 1970～1972  
正法眼蔵 1～4 水野弥穂子校注、岩波文庫  
正法眼蔵註解全書 神保如天、安藤文英共編 正法眼蔵註解全書刊行会  
原文対照現代語訳 道元禪師全集 春秋社  
西有穆残禪師提唱 正法眼蔵啓迪 西有穆残 大法輪閣  
正法眼蔵即心是仏 鎌谷仙龍 仏教情報センター  
正法眼蔵講讃 樽林皓堂 青山社  
正法眼蔵提唱録 1 卷中 西嶋和夫 仏教社  
現代語訳 正法眼蔵 玉城康四郎 大蔵出版  
道元辞典 菅沼晃編 東京堂出版  
仏教学辞典 法蔵館  
日本国語大辞典 精選版 小学館  
広辞苑第六版

2018年12月1日

現代語訳 金子勝俊 東京都狛江市在住 東京都世田谷区耕雲寺坐禅会会員